



ご あ い さ つ

小野 勝次*

去る4月27日の総会において、めでたく新会長に森口繁一君を迎えたことは、学会の発展のためにご同慶にたえない。わたくしが、昭和47年春、本学会が社団法人として再発足して以来、まがりなりにも2年間の任期を全うすることができたのは、ひとえに昭和47、48年度役員諸氏のご尽力と、会員各位のご協力の賜である。この機会に心からの御礼を申し上げたい。

わたくしの前の会長の方々、名だたる大実業家であった。そのあとを受けて、わたくしのよなものが会長の席を汚したのは、いささか奇異なことであった。わたくしは、なかば冗談のつもりで、わたくしを会長にすると集まる金も集まらなくなるだろうといったものであるが、わたくしの任期中にこの予想はなかば的中したのではないかと怖れている。任期中に、会費の値上げもお願いしなければならなかったし、値上げした直後にも運営はけっして余裕あるものにはならなかった。退任するにあたって、自己の無力を恥じるばかりである。

わたし自身は、ぜいたくもせず、金の心配もせずということを信条として暮らしているが、学会の運営には、やはり最小限の費用はいる。たとえば、学会誌は何としても立派に刊行していきたい。内容のすぐれた寄稿に対しては、必要なだけの頁数は確保したい。みな、金のいることである。

学会の経済からいえば、より多くの企業体に賛助会員になっていただきたい。しかし、われわれもオペレーションズ・リサーチを旗印に掲げる以上、はいつても無駄だという相手にまではいってくださいと頼むことはできない。また、頼むべきでもない。

しかし、“賛助”の意味するところ、やはり、直接の説得だけでは律し切れない性質のものであろう。賛助することが、大きな視野に立ったとき、妥当であるといいきれるだけのものを持っているなら、やはり賛助してもらうべきであらう。

個人的義理人情などから離れて、賛助すべきであると判断させるだけのものを作り出すことは、なかなかの大業である。しかし、この大業は学会としては、何としてもやり遂げなければならないことである。

ところで、これをやり遂げるためには、やはり誘い水はいる。現在は、この誘い水を必要としている時期であると思われる。自分の無力さを棚に上げた言い分で、まことに心苦しいが、関係各位の努力で必要な誘い水が得られ、また、それが関係各位の別方面の努力によって、誘い水としての効果を十分に発揮することを心から願っている。

* 名古屋大学名誉教授